

教育思想史学会

第32回大会プログラム

2022年9月17日(土)《会場受付》8:30~17:30

9月18日(日)《会場受付》8:30~17:00

【対面/オンライン並行のハイブリッド形式で開催します】

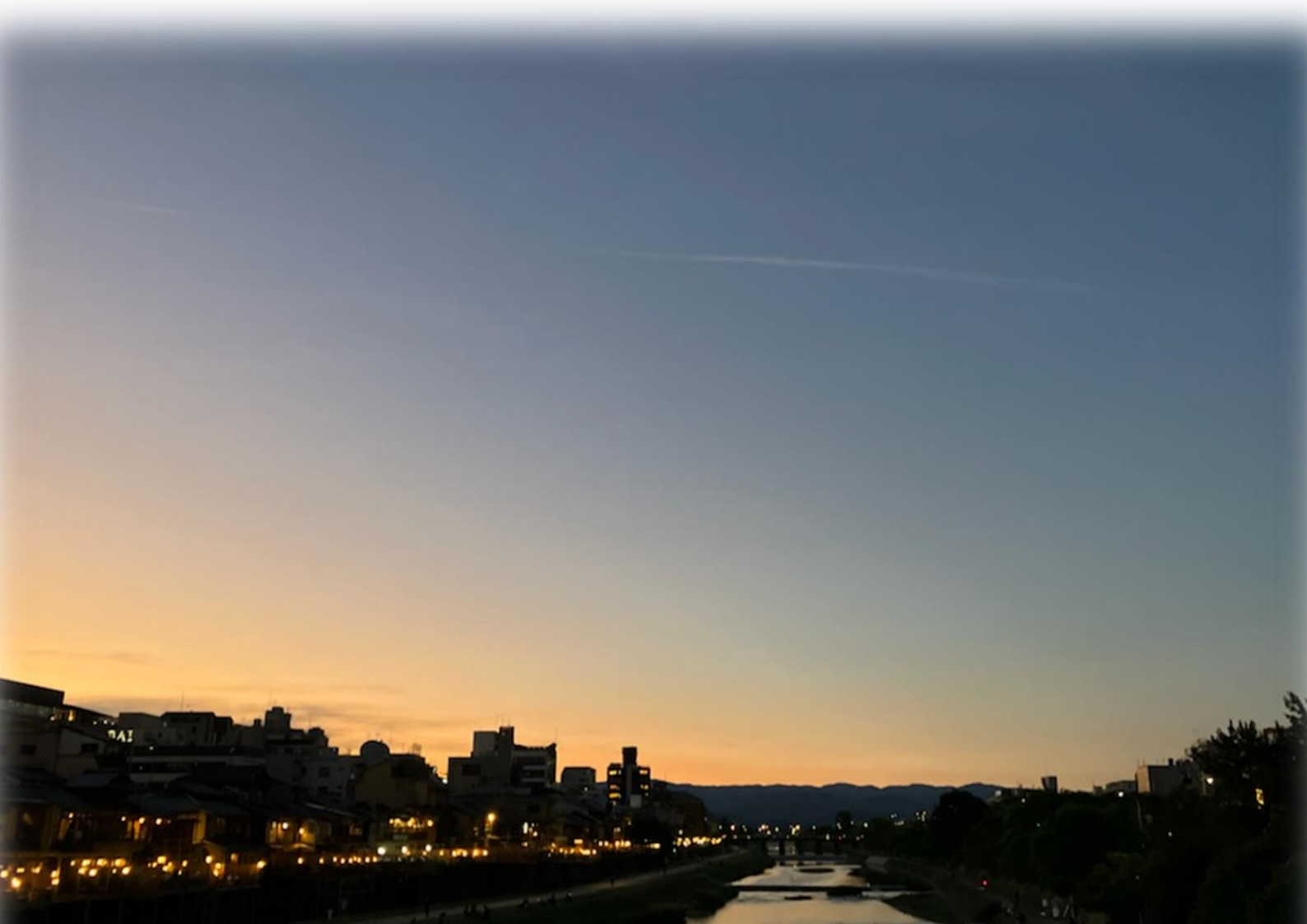
※オンライン開催のコロキウムにも教室を配当します

対面参加のみなさまは、配当教室から各自の視聴ツールでご参加いただけます

対面会場：同志社大学
今出川校地「新町キャンパス」じんしんかん尋真館

+

オンライン (Zoom)





【大会参加費】

	一般	学生
会員	2,000 円	1,000 円
非会員	2,000 円	2,000 円
※高校生以下は無料です		

【参加方法】

会場校における対面参加、Zoom によるオンライン参加にかかわらず、大会参加費を **9/2 (金) まで**にお振込みのうえ、**事前申込み**を行ってください。参加費の振込みを確認したのち、登録されたメールアドレスへ、大会サイト URL をお送りします。事前配布資料および Zoom リンクは、大会サイトのなかで公開いたします。

※会員のみなさまには、大会参加費用の振込用紙を送付します。**非会員の方も事前登録が必要です。**詳しくは大会プレサイトをご覧ください。

→教育思想史学会第 32 回大会プレサイト (<https://sites.google.com/view/hets-taikai-32-pre>)

※高校生以下の方は参加費振込みの必要はありません。申込み情報を記入するだけで結構です。

【オンデマンド配信期間】

公開開始：2022 年 9 月 9 日 (金) 09:00～

公開終了：2022 年 9 月 18 日 (日) 17:00 頃

教育思想史学会第32回大会へのお誘い

教育思想史学会会長 西村拓生

梅雨明けからの豪雨、急激な第七波、そして戦後政治の闇の突然の露呈と、いささか心穏やかならざる夏を迎えておりますが、今年も秋の大会のご案内を差し上げる時期になりました。

今年の第32回大会は、対面を基本としつつ、コロナ禍に対応した過去2年間のオンライン大会運営のレガシーも活かしたハイブリッド開催とすることを、先日の理事会で決定いたしました。9月17日(土)・18日(日)に(オンデマンド配信のコロキウムはその1週間前から)、同志社大学の新町キャンパスで、3年ぶりの対面での大会となります。

コロナ禍の経験は、私たちの学会活動のあり方を反省する契機ともなりました。オンライン大会が切り開いた新たな参加やコミュニケーションの可能性を実感できた一方、それでもやはり、直接顔を合わせ、場を共有しての議論への飢えを、私たちは今、素朴に感じているようにも思います。今年の大会が、皆さんそれぞれの事情に応じて、多くの会員の方々に久しぶりの京都への旅と学会でのナマの議論を楽しんでいただく機会となれば、また多くの会員の方々に引き続きオンラインでの大会参加の機会を提供することができれば、と願って準備を進めております。

昨年秋、学会運営をお引き受けするにあたってのご挨拶では、私たちの「歴史的現在」を如何に見立てるのか、という問いを念頭において学会の企画・運営を行ないたい、と述べました。第32回大会のプログラムも、そのための省察と討議の舞台設定を意識したものとなっております。シンポジウムでは、3名の気鋭の会員の方々に報告をお願いして、コロナ禍によって促進され、あるいは顕在化したように思われる「学びのメディア変容」を思想史から問い直し、議論します。昨年度の学会奨励賞受賞者の吉野敦会員によるフォーラム1は、フランスにおけるペスタロッチ受容の検討を通じて、文化的距離を超えた思想の受容・解釈の可能性という、私たちの思想史研究にとって死活的な問題をあらためて考える契機となりそうです。ベテランの森田伸子会員にご登壇いただくフォーラム2では、国家と戦争と宗教をめぐる年来のご研究の最先端を語っていただきます。巧まずしてこのテーマもまた、ロシアによるウクライナ侵攻によってあらためて私たちに突きつけられた「歴史的現在」の様相を深く問い直すものとなるはずです。

コロキウムも6つの意欲的で興味深い企画を出していただくことができました。その中には、「つながり」をキーワードとしてきた小玉前会長のもとで始められた高校生の大会参加を受け継ぐ企画も含まれます。開催方式も、オンデマンド、同時双方向、会場での対面とのハイブリッドなど、それぞれに工夫を凝らしてくださっており、会員の皆さまには多様な内容と参加の方法から選んでいただだけそうです。

お送りするプログラムをご覧いただいた上で、多くの皆さまに初秋の京都でお目にかかることができるよう願っております。

※なお、新型コロナの今後の感染拡大状況によっては、急遽、昨年同様の全面オンライン大会に切り替える可能性もあります。事務局からの連絡にご注意ください。

大会日程

【第1日 9月17日(土)】

08:30 ~	受付 (1階エントランスホール)
9:00-11:30	コロキウム1 (会場: Z24 教室) ハイブリッド形式: 対面+オンライン同時双方向型 エネルギーの教育思想史序説 ※9/9 (金) オンデマンド資料公開 —フロイト、シュタイナー、バタイユを事例として—
	コロキウム2 (会場: Z26 教室) ハイブリッド形式: 対面+オンライン同時双方向型 18歳成人時代の主権者教育を考える ※9/9 (金) オンデマンド資料公開 —サブジェクトとエージェントのあいだで—
	コロキウム3 (会場: Z28 教室) ハイブリッド形式: 対面+オンライン同時双方向型 近代仏教と教育をめぐる学説史的研究III
11:30-13:30	昼食
※12:00-13:00	理事会・編集委員会 合同会議 (会場: Z24 教室) ハイブリッド形式: 対面+オンライン同時双方向型
13:30-15:15	フォーラム1 (会場: Z21 教室) ハイブリッド形式: 対面+オンライン同時双方向型 マルク=アントワヌ・ジュリアンのペスタロッチ受容
15:45-17:30	フォーラム2 (会場: Z21 教室) ハイブリッド形式: 対面+オンライン同時双方向型 第二次世界大戦期フランスにおける戦争と死の哲学 —コジェーヴとイポリットのヘーゲル論を中心に—

【第2日 9月18日(日)】

08:30 ~	受付 (1階エントランスホール)
9:00-11:30	コロキウム4 (配当教室: Z24 教室) オンライン同時双方向型 批判理論と教育/教育学の思想—激動の時代とその後—
	コロキウム5 (会場: Z26 教室) ハイブリッド形式: 対面+オンライン同時双方向型 教育思想史の特殊性はいかに考えられたか —歴史叙述のなかの科学/技芸としての教育—
	コロキウム6 (会場: Z28 教室) ハイブリッド形式: 対面+オンライン同時双方向型 パトスの語り方を問う
11:30-13:00	昼食
13:00-13:45	奨励賞授賞式&総会 (会場: Z21 教室) ハイブリッド形式: 対面+オンライン同時双方向型
14:00-17:00	シンポジウム (会場: Z21 教室) ハイブリッド形式: 対面+オンライン同時双方向型 学びのメディア変容の思想的/同時代的考察 —GIGA スクールの時代をどう見るか—

会場案内図

同志社大学今出川校地「新町キャンパス」^{じんしんかん} 尋真館 1階・2階

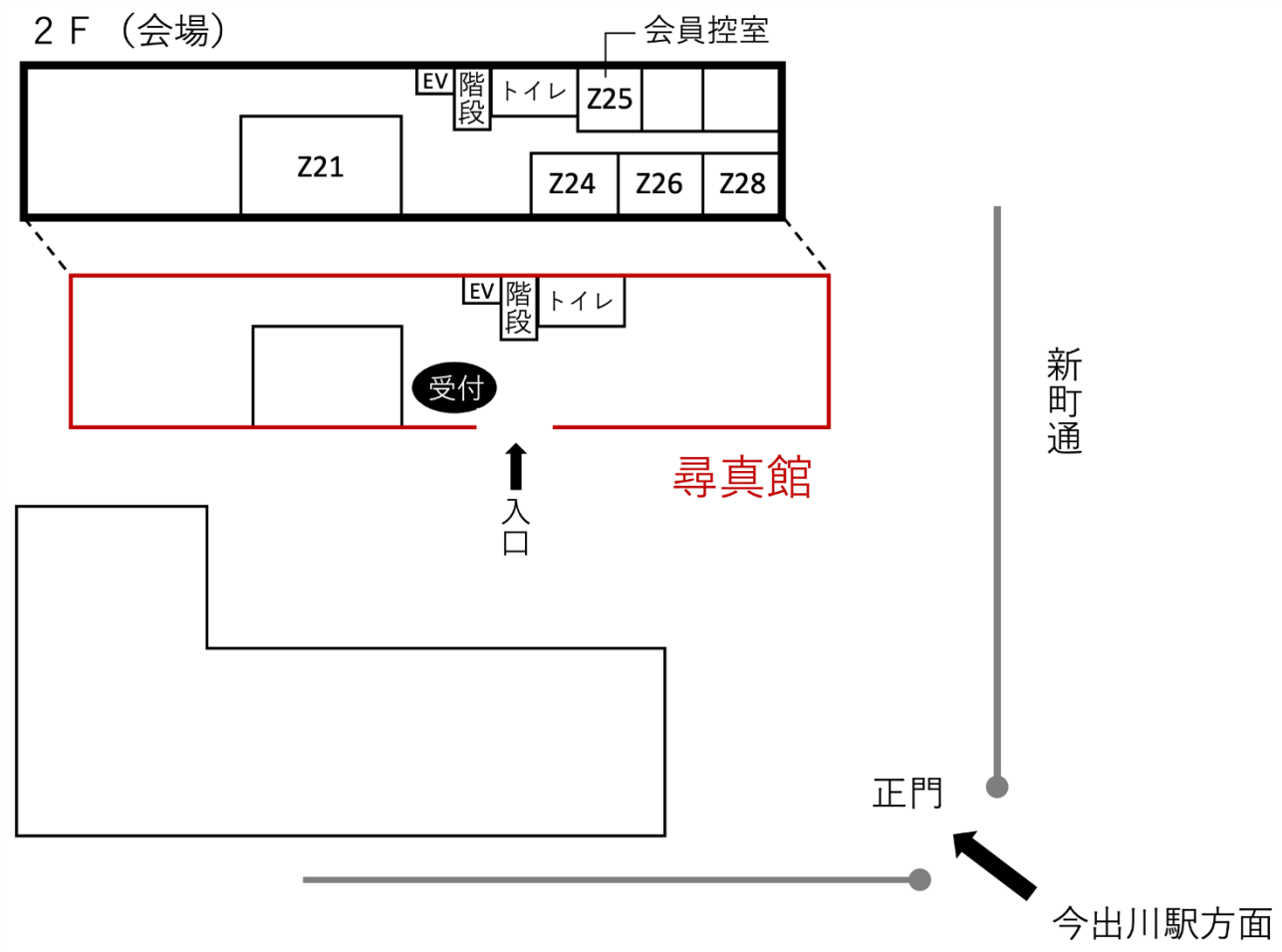
【アクセス】地下鉄烏丸線「今出川」駅から徒歩10分
(最寄り：4番出入口)
京阪電車「出町柳」駅から徒歩25分
バス停「上京区総合庁舎前」から徒歩3分



↑ 建物外観



←
地下鉄今出川駅から
新町キャンパスへ



館内教室配置 ↑

対面会場：Z24 教室 オンデマンド資料あり

9月17日（土）

コロキウム1 9:00-11:30

（ハイブリッド形式：対面+オンライン同時双方向型）

エネルギーの教育思想史序説

ーフロイト、シュタイナー、バタイユを事例としてー

企画者・司会者：井谷 信彦（武庫川女子大学）

報告者：後藤 悠帆（ドルトムント工科大学）

広瀬 綾子（新見公立大学）

森 亘（大竹栄養専門学校）

指定討論者：今井 康雄（日本女子大学）

エネルギーの教育思想史をめぐる探索は、19世紀初めの自然科学において「発見」されたエネルギー（energy/Energie）という概念が、教育学の諸分野に与えた影響とその意味を明らかにすることを課題とする。本コロキウムはその端緒を築こうとするものである。近現代の自然科学の発展はエネルギー理論の発展と共にあった。経済学を始めとする人文・社会科学の諸分野も、さらには演劇、音楽、舞踊といった芸術の諸分野も、このエネルギー理論に大小の影響を受けてきた。むろん教育学も例外ではない。例えばデューイは彼の教育思想の核心を占める経験の概念を「エネルギーの相互作用」として説明している。本コロキウムにおいては、①自然科学におけるエネルギー概念の「発見」とその特徴、②アリストテレス哲学とエネルギー概念の来歴、③自然科学のエネルギー理論と教育思想の結節点としてのフロイトの精神分析およびシュタイナーの教育学、④バタイユの蕩尽論にみるエネルギー理論の現代的意義などの諸点について、報告者の発表をふまえて議論を深めたい。

なお、本コロキウムは事前に大会 Web サイトに報告者らの発表資料を公開したうえで、当日は対面（会場校）と遠隔（Zoom）のハイブリット形式で開催する。当日は報告者らによる口頭発表は最小限の概説に留め、指定討論者からの問題提起を出発点として、フロアの会員各位との談論を中心とする構成をとりたいと考えている。

対面会場：Z26 教室 オンデマンド資料あり

コロキウム 2 9:00-11:30

(ハイブリッド形式：対面+オンライン同時双方向型)

18 歳成人時代の主権者教育を考える

—サブジェクトとエージェンシーのあいだで—

企画者：田中 智輝（山口大学）

司会者：村松 灯（帝京大学）

報告者①：榎原 まひろ・飯田 陽一郎・根本 奎・松坂 風亜
（東京大学教育学部附属中等教育学校 6 年）

報告者②：田島 史織（東京大学教育学部 3 年）

指定討論者：小玉 重夫（東京大学）

*撮影協力：矢部 建（東京大学教育学部附属中等教育学校 6 年）

2022 年 4 月、高等学校において必修科目「公共」が実施となり、時を同じくして民法上の成人年齢が 18 歳に引き下げられた。アクティブ・ラーニングへの転換を柱とした高等教育改革の方針が示された 2012 年（「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（答申））から 10 年へて、いま、「主体性」の育成に注力してきた一連の取り組みの成果が問われる時期にさしかかっている。

こうした転換期のなかで、企画者らは教育思想史学会において高校生・大学生とともに知と力の構造転換をめぐる議論を重ねてきた。主権者教育の画期となる本年度をむかえるにあたって、本コロキウムでは、これまでの議論を土台としつつ、高校生・大学生とともに 18 歳成人の時代においてどのような主権者教育が求められているのかについて考えてみたい。報告をつうじて各登壇者から政治的主体としての経験や思いがさまざまに語られることになるだろう。そうした語りを手がかりに、主体-服従（subject）の構造を切断する変革主体（agency）としての主体性を育むことが教育においていかに果たされるのか、その可能性を探りたい。

なお、本コロキウムの実施にあたって、報告および指定討論者との質疑応答の様子をオンデマンド配信するとともに、大会当日は会場での対面形式ならびに Zoom によるオンライン（同時双方向型）にて参加者とのセッションを実施する。

対面会場：Z28 教室

コロキウム 3 9:00-11:30

(ハイブリッド形式：対面+オンライン同時双方向型)

近代仏教と教育をめぐる学説史的研究Ⅲ

企画者・司会者：眞壁 宏幹（慶応義塾大学）

報告者：マイケル・コンウェイ（大谷大学）

田中 潤一（関西大学）

渡辺 哲男（立教大学）

指定討論者：山本 正身（慶応義塾大学）

過去2回、我々は、明治から昭和戦前期における近代仏教と教育（学）の関係についてコロキウムを企画してきた。近代ヨーロッパの教育学・哲学・心理学を学び、それを教育実践に落とし込もうとしてきた教育者・教育学者・学生が、なぜ近代仏教（浄土真宗、日蓮主義、禅宗など）に深い関心を寄せてきたのか、そしてなぜ教えに反する部分がありながら近代国体論に取り込まれていったのか、こうした問題を具体的事例に即して考えてきた。今回も、近代仏教は、教師・教育学者・学生たちに実存問題へ向き合う形而上学的姿勢と修養のかたちを示しえたことで「教育を支えるもの」とみなされていたこと、教育を含めた社会現実を変革する原動力として期待されていたこと、そしてそのことがまた国体論に取り込まれていくきっかけにもなってしまったことなどを前提としつつ、さらに新たな事例を検討し、近代仏教がもっていた可能性と限界について参加者と共に考えていきたい。発表は、マイケル・コンウェイ氏（非会員・大谷大学）が真宗大谷派僧侶・暁烏敏が昭和戦前期に構想した「大日本文教研究院」について、田中潤一会員（関西大学）が目白僧園の僧侶・釈雲照が主催した「十善会」と澤柳政太郎の関係から戒律仏教の影響について、渡辺哲男会員（立教大学）がポストモダン建築家・黒川紀章と、彼の中高時代の師である浄土宗僧侶・椎尾弁匡の思想の影響関係について発表を行う予定である。司会は眞壁宏幹が務める。なお、本コロキウムは会場での対面形式ならびに Zoom によるオンライン（同時双方向型）のハイブリッド形式で開催する。

フォーラム 1 13:30-15:15

(ハイブリッド形式：対面+オンライン同時双方向型)

マルク＝アントワーヌ・ジュリアンのペスタロッチ受容

報告者：吉野 敦（大分大学）

司会者：綾井 桜子（慶應義塾大学）

産業革命とフランス革命、二つの革命とともに幕を開けた近代社会の黎明期というべき 19 世紀の初頭、スイスの教育思想家ペスタロッチの「メトード」がヨーロッパ諸国の教育家たちの関心を集めていた。隣国フランスでも、このスイスの教育家の教育法を取り入れようとする動きがあった。その中心となったのが、比較教育論の祖とも評されるマルク＝アントワーヌ・ジュリアンである。当時の啓蒙主義的な博愛家たちとともに民衆階層への初等教育の拡大浸透に努めたジュリアンは、その活動の一環として、ペスタロッチの学校を訪問、1812 年に『ペスタロッチの教育方法の精神』(Esprit de la méthode d' éducation de Pestalozzi) を出版する。この著作は、当時フランス語で読みうる最も充実したペスタロッチ教育論の解説書であった。しかし、奇妙なことに、この著作の冒頭でジュリアンは、自分が「不幸にもドイツ語の知識を全く持ち合わせておらず」、メトードやペスタロッチの学校に関する「ドイツ語で書かれたどんな著作も」参照することができなかったと告白する。ある種の弁解であるとともに、「メトードの精神」を洞察するために言語は障壁とならないという大胆な主張をも含むこの告白は、他方でフランスにおけるペスタロッチ受容を条件づける、ドイツ語圏とフランスの文化的距離を象徴的に示している。ドイツ語とフランス語という二つの言語が教育思想史のなかで演じてきた役割を考慮するとき、ペスタロッチというドイツ語圏スイスの教育思想家の言説が、異なる文化的・歴史的風土をもつフランスにおいて、いかに解釈され、いかなる意義を与えられたのかという問いは、重要性を帯びたものとなる。本報告では、こうした問題意識のもとで、当時のフランスの社会情勢や政治的争点、教育思想的課題をもふまえつつ、ジュリアンの著作を中心として、フランス側のペスタロッチ受容に関わる教育言説を検討し、その特徴を明らかにする予定である。

フォーラム 2 15:45-17:30

(ハイブリッド形式：対面+オンライン同時双方向型)

第二次世界大戦期フランスにおける戦争と死の哲学

—コジェーヴとイポリットのヘーゲル論を中心に—

報告者：森田 伸子

司会者：岡部 美香（大阪大学）

「国家防衛あるいは革命にさいして、歴史に帰属する個人は命を賭けなければならない。こう書いた1937年当時…政治的決定が特定の死の選択であってみれば、それは同時に生き方の選択でもあったのだ」。レイモン・アロンはこう回想している。1936年のラインラント非武装地帯へのドイツ軍侵攻、パリ占領、休戦協定と対独協力ヴィシー政府の成立後、ユダヤ人であったアロンはフランスを離れロンドンの亡命政府で「自由フランス」の刊行に従事することになる。彼の回想録には、生死にかかわる政治的決定に不断に迫られていたフランスの知識人たちの苦悩が生々しく描かれている。同時にこの時代は、1931年、国際ヘーゲル連盟が設立されるなど、ヘーゲル勃興の時代でもあった。フランスにおけるヘーゲル主義は、終戦直後相次いで出版された二人の哲学者の著作によって代表される。一人は革命ロシアからのユダヤ人亡命者であるアレクサンドル・コジェーヴの、戦時中のパリ高等研究院での講義録を再録した『ヘーゲル読解入門』1947年、もう一つはジャン・イポリットの『ヘーゲル歴史哲学序説』1948年である。両者とも、国家と戦争と死を中心テーマとしながら、前者は主と奴の血塗られた闘争の果てに等質で普遍的な国家によって歴史の終わりが到来するという、独特なマルクス主義的『精神現象学』解釈を提示し、戦後フランス思想界に大きな影響を与えた。後者イポリットは、戦争の哲学を初期から晩年にいたるヘーゲル哲学の一貫したテーマとして位置づけ、それをルソーの一般意志論の抱える矛盾と関係づけてとらえる解釈を示した。そこには、アロンが回想する戦時期の経験が色濃く反映していると同時に、戦争をとらえる二つの異なる視点がくっきりと表現されている。戦争の思想史の取り組みの第一歩として、この二つのヘーゲル論を読むことから始めたい。

9月18日（日）

コロキウム4 9:00-11:30
（オンライン同時双方向型）

批判理論と教育/教育学の思想

—激動の時代とその後—

企画者・司会者：藤井 佳世（横浜国立大学）

報告者：井関 正久（中央大学）

白銀 夏樹（関西学院大学）

藤井 佳世（横浜国立大学）

本コロキウムでは、ドイツにおける批判的教育科学の更新を目的とし、批判理論と教育学の関係について再考する。批判的教育科学は、1960年代半ばに批判理論から影響を受けて始まり、解放の教育を実践する教育改革を各地で推し進めたが、その改革の失敗とともに1980年代以降に衰退した。その後、批判理論と教育学の接続は、十分に展開されなかった。

近年、ビースタが解放概念に含まれる矛盾を指摘し、ランシエールの平等概念から新しい解放の教育学を提案しているように、教育改革の失敗だけではなく理論的問題も明らかにされている。また、1960年代のドイツは、戦後ドイツを巡る世代間の断絶が意識された時期でもあり、高等教育への進学者が増加した時でもあった。

そこで、本コロキウムでは、批判的教育科学が始まった1960年代から衰退した1980年代初頭までを対象とし、ドイツの政治状況と重ね合わせながら、教育によって社会を変えようとする社会変革と教育改革の思想について考えてみたい。とりわけ、教育における批判やコミュニケーションを支持する考えや機会平等の意識を反映した教育実践を考慮しながら、政治史と教育学の観点からの報告を組み合わせ、それぞれの視点から見える世界を立体的に構築できるような議論を進めたい。

なお、本コロキウムは、Zoomによるオンライン形式（同時双方向型）で開催する。

コロキウム5 9:00-11:30

(ハイブリッド形式：対面+オンライン同時双方向型)

教育思想史の特殊性はいかに考えられたか

—歴史叙述のなかの科学／技芸としての教育—

企画者・司会者：岸本 智典（昭和音楽大学）

報告者：岸本 智典・高宮 正貴（大阪体育大学）

指定討論者：小山 裕樹（聖心女子大学）

教育についての学は「科学〔science〕」たりうるのか、教育は「技芸〔art〕」でありそれは「科学」たりえないのではないかという問いは、一九世紀を通じての新たな自然諸科学や社会諸科学の進展や国際的な知見の交換ないし共有の広がりを背景に、特に教師教育をめぐる議論のなかで焦点化されることとなった。本コロキウムでは、一九世紀英米の幾人かの代表的な（広義の）教育思想史家（具体的にはロバート・ハーバート・クイックやヘンリー・バーナードら）を取りあげ、彼らが教育(学)の歴史を描くときに、この「科学」か「技芸」かという問いをいかに処理し、教育に関する歴史叙述の特殊性や、延いては教育学や教師教育の特殊性をいかに思考していたかについて考察する。

本番では、報告者からの英米それぞれについての二つの報告のあと、指定討論者からのコメントを受け、参加者全体での議論へと開きたい。

コロキウム 6 9:00-11:30

(ハイブリッド形式：対面+オンライン同時双方向型)

パトスの語り方を問う

企画者：浅井 健介（奈良教育大学）

森田 一尚（大阪樟蔭女子大学）

司会者：岡部 美香（大阪大学）

報告者：浅井 健介（奈良教育大学）

森田 一尚（大阪樟蔭女子大学）

高谷 掌子（京都光華高等学校他）

門前 斐紀（金沢星稜大学）

指定討論者：生澤 繁樹（名古屋大学）

桑嶋 晋平（九州看護福祉大学）

近代の合理主義や機能主義が縮減し、切り詰めてきたものを救い出そうとする試みは、本学会のなかでも様々な思想系譜への参照を通じて繰り返し行われてきた。関西を拠点とする教育思想史・教育哲学研究者を中心に昨年刊行された『教育学のパトス論的転回』（岡部美香・小野文生編、東京大学出版会）も、そのような試みの一つである。「パトス」という視点は、従来「他者」、「臨床」、「生成」など、それ自体様々な立場から論じられてきたテーマをゆるやかにつなぐとともに、「パトス」の対立項として捉えられてきた「理性」、「啓蒙」概念の再検討へと私たちを誘ってきた。しかし、この「パトス」概念の語り方は、一様ではない。それはどの思想（家）に依拠するか、また、語る本人（研究者）の時代感覚や世代意識によって大きく左右される。

本コロキウムでは、『教育学のパトス論的転回』を起点にして報告者が、ベンヤミン、フロム、デュローイ、西田幾多郎、田邊元、木村素衛など、それぞれの研究の立場から、パトスの語り方についての問題提起を行う。その報告をもとに、パトス論の可能性について考えるだけでなく、広く、教育思想史研究の取り組み方をめぐって、世代や思想的背景の異なる参加者同士が対話することのできる場をつくりたい。

なお、本コロキウムは会場での対面形式ならびに Zoom によるオンライン（同時双方向型）のハイブリッド形式で開催する。

シンポジウム 14:00-17:00
 (ハイブリッド形式: 対面+オンライン同時双方向型)

学びのメディア変容の思想史的／同時代的考察

—GIGA スクールの時代をどう見るか—

報告者: 奥井 遼 (同志社大学)
 國崎 大恩 (福井県立大学)
 広瀬 綾子 (新見公立大学)
 司会者: 西村 拓生 (立命館大学)

新型コロナウイルスによるパンデミックは、私たちの教育や研究のあり方を大きく変えてしまった。今後、ワクチンや治療薬が普及したとしても、もはやかつての日常には戻れない、いわば文明史的な変化に私たちは直面しているように思われる。そのような大きな変化の一つのあらわれが、学校教育へのICTの急激な導入拡大である。とりわけ日本では、2018年の経産省の「未来の教室」実証事業から始まり、コロナ禍直前の2019年末に文科省が打ち出していたGIGAスクール構想が、感染拡大・一斉休校を契機に一気に加速して実現に向かっている。他方、こんな話もしばしば耳にする。すなわち、シリコンバレーで最も人気がある学校は（低中学年では）ICT機器を一切使わないシュタイナー学校である、と。これは何を意味するのか。ICTの教育への導入は、子どもたちの育ちや学習過程や人間関係に大きな変化をもたらすこと、そしてそれが決してポジティブな影響だけではないことを、当の技術の開発・販売者たちが直感している、ということかもしれない。

しかし今、日本では、ICT導入に対して教育現場にあった様々な疑問や戸惑いを、「子どもたちの学びを止めない」という大義名分が押し流しているかのようである。その奔流に対して、敢えて立ち止まって、そのことの意義と危険とを反省することは、教育学の重要な使命であるように思われる。とりわけ、過去においても学習のメディアの変容が教育のあり方を、延いては人間のあり方そのものを、大きく変えてきた歴史があることを、私たちは知っている。その歴史に照らして、今、コロナ禍を契機に進行していることを考察してみたい、というのがシンポジウムの企画趣旨である。

ご登壇いただく三人の会員の現時点での報告の見通しは以下の通りである。奥井遼会員には、オンラインコミュニケーションやテレプレゼンスに関する現象学的研究を踏まえて、ICTを含めた現代テクノロジーと私たちの生活世界、とりわけ身体的コミュニケーションとの関係を考察していただく。國崎大恩会員には、新教育（アメリカ進歩主義教育とデューイ）における学習メディアの変容の思想史的考察を踏まえて、ICT導入に関する今日的議論から「学ぶ、教える」という関係性の問い方そのものの問い直しを展望していただく。広瀬綾子会員には、シュタイナー学校での（高学年での）ICT導入に関する思想的・原理的考察を通じて、そこから今日の日本の教育におけるICT導入の根拠や背景を照射し、問い直ししていただく。



教育思想史学会
第32回大会 大会プログラム

2022年7月31日発行
教育思想史学会事務局編集